

(0)
F. X. CHARET . *Spiritualism and the Foundation of C. G. Jung's Psychology*

State University of New York Press, 1993, 329pp.

堀江宗正

近年C・G・ユング (Carl Gustav Jung, 1875-1961) に対する関心は高まりつつある。分析心理学の創始者であり、かつ宗教にも造詣が深いこの思想家は、他方ではアカデミズムという枠を越えて、ニュー・エイジ運動や新霊性運動にも多大な影響を及ぼしている。一方、このような多面的性格を帯びた思想家を扱うその試みも、また極めて多岐にわたっており、その主要なアプローチとしては、比較思想的研究、方法論的検討、伝記的研究、思想史的位置付けなどがあげられる。⁽¹⁾

本著作は、豊富な伝記的資料をもとに、ユング心理学の基礎にスピリチュアリズムの影響があったということを跡づけたもので、ユングを思想史上に位置付ける作業に新しい視点を提供してくれる。従来、ユングの宗教観や宗教的影響が考察される場合、キリスト教や東洋の諸宗教との関わりに注意の向けられることが多かった。幼年時代から学生時代にかけて、ユングがスピリチュアリズムに深く関わっていたことを示す証拠が取り上げられることはあっても、ユング心理学の理論や諸概念の形成における、その影響ということにまで論考が及ぶことは、実際少なかったのである。⁽²⁾ 本著はそのような試みとしては本格的なものであり、その意義は大きい。以下、章だてに沿って、その概要を追って行く。

第1章「メスメリズム、催眠術、スピリチュアリズム」では、この三者の19世紀における相互関係が、社会史および医学史の文脈から論じられる。それらに共通して見られるトランス現象は、民衆レベルでは霊界とのコミュニケーションの証拠として解釈されたが、医学的見解では解離と精神病理の証拠として解釈される。そのような自律的・心霊のプロセスが常に病的であると言えるのか、ということはユングにとっても問題となるが、結局の所、ユングはこれを否定することになる。19世紀におけるメスメリズム、催眠術、スピリチュアリズムの絡み合いの中に、すでに問題の背景は含まれていたわけである。

第2章「C・G・ユングの幼年期における父母的・宗教的葛藤」では、父方のキリスト教的背景と母方のスピリチュアリズム的背景が対比され、後者が前者よりも決定的であったということが論証される。母方の家族は、解離を特徴とする霊媒の素因を持っており、ユングもこれを共有していた。そこでは、体験を重視するスピリチュアリズム的信念もまた共有されていたのだが、これは体験から宗教的信念を峻別することに苦心していた父と

の相違点となった。その緊張は深刻であり、ユングは反動として、自分と同名の祖父カール・グスタフ・ユング(1794-1864)がゲーテの子供であるという噂に依拠して、父方の先祖を神話化せねばならないほどであった。またこの父母的・宗教的葛藤は、ユング内部の人格的分裂(知的・現実的人格と、直観的・非現実的人格)とも対応している。ここまでが第1部:「背景」であり、続く第3章からは、第2部:「大学時代」が始まる。

第3章「カントとショーペンハウアー、そしてスピリチュアリズムの哲学」で論じられているのは、カントとショーペンハウアーの著作が、ユングの知的なスピリチュアリズム理解を基礎付けたということである。⁽³⁾この二人の哲学者に共通しているのは「本体/現象」の二分法である。彼らによれば、霊は現象的なものを越えた物自体に属するのであり、それが生者に働きかける可能性は否定も肯定もされない。しかしながら、現象として現れるかぎり、それは媒介となる個人の心理的・病理的資質の影響を被る。その意味において、カントなどはスピリチュアリズム的現象を、主観的空想として解釈する。彼らの哲学が若いユングを惹き付けたということは『自伝』でも明らかだが、⁽⁴⁾それがユングにとってスピリチュアリズムの心理学的理解の源泉でもあったということは、はじめて考究されたところである。

第4章「ユングのツォフィンギア講演におけるスピリチュアリズム」では、前章の議論が、学生団体ツォフィンギア・クラブでユングが行った講演の中で、実際に例証される。なおこの「ツォフィンギア講演」は1983年に出版され、その重要性も認識されていたが、細かい分析は加えられていなかった。⁽⁵⁾この講演で、ユングはカントとショーペンハウアーを引いてスピリチュアリズム的現象に哲学的分析を加えるが、同時にその心理学的性質をより明らかに理解するために、精神医学へと移行する途次にあった。

第5章「ユングの医学学位論文における多重人格とスピリチュアリズム」では、ユングの学位論文『いわゆるオカルト現象の心理と病理について』が取り上げられる。⁽⁶⁾ここに登場する霊媒はユングの従姉妹であり、降霊会が行われたのはユング自身の家であった。ある資料によれば、彼女はユングに恋していたようである。一方ユングは、その霊媒的素質ゆえに、彼女と同一化していたようである。このため論文は、ユングの自己分析という要素も兼ね備えていたと考えられる。また論文上で、ユングは病理学的説明を退けたものの精神医学的・心理学的説明を行い、霊媒のいう諸霊とは彼女が期待する将来の発達した人格のことであるとしている。降霊会では、前世を舞台とする性的空想(例えば彼女がゲーテを誘惑した有名な霊媒であった、などといったファミリー・ロマンスの系譜)が繰り上げられるが、これに対してユングは、中途半端な説明しか施していない。著者によれば、ユングは降霊会で発現した性的感情を分析するのに困難を感じており、それゆえフロイトの性理論に魅力を感じたということである。ここまでが第2部であり、続く第6章からは、

第3部：「精神分析時代」に入る。

第6章「ユング、フロイト、スピリチュアリズム的現象をめぐる対立」では、フロイトとユングの関係において、スピリチュアリズム的現象の解釈が果たした役割が述べられている。ユングは引き続きスピリチュアリズムに関心を寄せており、その示現を科学的に理解するための心理学的方法とモデルとを捜し求めている。ユングはスピリチュアリズム的現象が性理論では説明し尽くされないと考え、精神分析がそのような現象を扱うためには、その理論的基礎を広げる必要があると感じていた。しかしながらフロイトの方は、スピリチュアリズム的現象に興味を抱きつつも、ユングのようにスピリチュアリズム的データを第一の素材として真剣に考察し、その上に一つの心理学をうち建てるほどの準備がなかった⁽⁷⁾。第3部はこの章だけで、続く第7章からは第4部：「分析心理学とメタ心理学」が始まる。

第7章「スピリチュアリズムとユング心理学の出現」では、フロイトとの訣別後、1912年から1920年までの時期にユングに起こったスピリチュアリズム的現象の意義が検討される。それら一連の現象は『死者への七つの語り』に結実する⁽⁸⁾。ここでは対立物の問題、元型、個性化など、ユングの後の諸思想がほとんど全て現れている。そしてこの時期以降、個人的コンプレックスと、個人的でないコンプレックスとの区別も現れる。後者はより集合的な表象であり、後に「元型」と呼ばれることになる。

第8章「結論：元型と霊」では、これまでの議論が要約され、それを踏まえてユング心理学の晩年に至るまでの変容過程が描かれて行く。ここまでのユングの態度はカントと同様、個人的信念とは別に、知の対象と信の対象とを峻別するというものであった。しかしながら「元型」概念以降、ユングは次第に経験科学のリミットを越え、理論的・思弁的なメタ心理学的問題へと関わって行く。元型は、意識に現れない元型それ自体「プシコイド psychoid」と、意識に現れる「元型的イメージ」とに分けられ、前者は超越的実在で超心的 transpsychic であり、後者は霊媒や心 psyche によって条件づけられる。したがって、元型は人間の意識においては象徴的に現れるということである。この点はカントと類似している。だが、カントが空想にふけることを本体／現象の壁を脅かす危険な行為と見なしていたのに対して、ユングは空想を元型の存在をあらわにする手段として、または「能動的想像 active imagination」といった形で、意図的に活用しようとする。最後にこの壁を決定的に揺るがしたのは、「共時性」の概念である。カントは、スウェーデンボルグが遠隔地の火事を超心理学的に知ることができたという事例を引用し、それに印象づけられつつもこれを超心理学的知覚として説明することは避けたのだが、ユングは同じ例に言及しながらも、時間・空間・因果性を相対化するような超心理学的性質を帯びた現象が存在する、あるいは人間の心には時間・空間・因果性を相対化するような次元が存在すると結論する。

これは、信の対象は知の対象ともなるのだ、と言うのに近い。このようにしてユングは、ヌミノースム的な体験を心の内部に据えながら、それを他の因果的要因には還元しないような独自の心理学を展開することになったのである。このような心理学を打ち立てることで、彼は宗教と科学を、ともに心それ自体の中へと持ち込むことになった。そうすることによって、長年の分裂を癒し、そして彼自身をも癒したのである。

本著の独自性は、スピリチュアリズムがユング心理学の基礎にあったということを丹念に跡づけ、主題化したことである。その点で本著は、ユングを思想的に位置付ける作業に新たな視点を導入したという意義を持つ。だが、ここで新たな疑問が湧いてくる。果たして、スピリチュアリズムとユング心理学は全く同一のものなのか、それとも何らかの点で異なるものなのか。また両者が異なるとすれば、それはどのような点で異なるのであろうか。この問題に、著者は明確な答えを与えてくれない。著者が描くユング心理学の生成過程とは、スピリチュアリズム的バックグラウンドから出発し、カント、ショーペンハウアー、フロイトの思想的影響を通過しながらも、スピリチュアリズム的現象の体験に触発されて、それらの思想的影響を乗り越え、次第にスピリチュアリズム的現象を考慮するような心理学へと変化して行くという、いわば原点回帰の軌跡であるように思える。もちろん、ユング心理学が単なる信の立場への回帰ではなく、むしろ知と信の立場の架橋であったということは、著者も認めるところであろう。これは結論部分でも触れられているところである。しかしながら、それからさらに一步踏み込んで、例えば個人的でない集合的表象である元型と、個性を持った死者の霊の観念との相違ということになると、著者は黙して語らない。

著者はスピリチュアリズムという術語を、第一に「生きるものと死せるものとの間のコミュニケーションを信じること」と規定し、第二に「この信念に結びついた様々な体験と観念」をも含意するものとして規定する。⁽⁹⁾ユングが元型や共時性の概念を持ち出すことによって、第一の定義にあるようなコミュニケーションの可能性の考察に向かっていったということは、本書で示されている通りだが、それに付随する具体的な諸観念・諸信念とユング心理学との異同は詳しく論じられていない。これを論じるためには、まずユングの用いる概念の精査が必要であり、次にそのスピリチュアリズム的信念との比較が必要である。資料としては、ユングの理論的著作が用いられるであろう。しかしそれ以外にも、スピリチュアリズム的諸信念とユング心理学との鋭い対決を描いた、重要な「神学的」著作がある。それは、著者もとりあげた『死者への七つの語り』である。ここで、ユングは、個別性を持った死者たちに、個別性を持たない無あるいは充満の観念を説く。そこでは、神は個別性を持ち悪魔と対立する被造物とされ、その上に無あるいは充満としての至高の神が立てられる。そして、死者の霊はいまだ個別性を持ち、死後の長い旅をゆく未完の存在

とされる。キリスト教徒である死者たちは、ユングの説教に抵抗しつつも、最後には沈黙し、たき火の煙のごとく立ちのぼってゆく。この著作を、ただキリスト教的信念とグノーシス主義的ユング思想との対決という文脈からとらえるのではなく、個別的霊に関するスピリチュアリズム的信念とユング思想の対決という文脈から解釈することは、可能でないか。

これ以上深入りすることは、評者の任を越える。しかし、著者にはもっと深入りして欲しかった。著者は、ただ資料の選択と配列と記述とに終始するのではなく、宗教哲学的考察に踏み込んで良かったのではないか、というのが評者の見解である。

しかし、一つの研究に、余りにも多くのことを要求するのは不当であろう。本著が、今後ユングとスピリチュアリズムとの関係を論じる上で、欠かすことのできない労作の一つとなっているということには、評者も疑念を抱かない。

いずれにせよ、本著はユングの著作と同様、多方面の読者に訴えることとなるであろう。研究者にとっては、手堅いながらも新しい知見と視点を提供してくれる重要な著作である。派閥的意識にとらわれることなく、ユングの本質を洞察しようとしており、ある程度それに成功している。フロイトとの関係を扱った6章からは、フロイト研究者も得る所があるはずだ。また一般の読者にとっては、科学と霊性を探究するユングの一面を生き生きと描き出してくれる好著であろう。読者はそこから何らかの示唆や靈感を得るかもしれない。そしておそらく、なによりも見逃してはならないのは、淡々としておりながら、時に深い感銘を与えてくれる、その語り口である。

注

- (0) 著者F・X・チャレットについて簡単な紹介をしておく。1949年生まれ、マクギル大学宗教学部卒、オタワ大学宗教学科でPh.D.を取得。本著はその博士論文に基づいているようである。現在は両大学その他で、宗教心理学と宗教哲学を講義している。なお評者が著者から受け取った手紙によると、Charetはフランス語名であるが、家族内においては英語式の発音で通じている。ちなみにF.X.とはFrancis Xavierの略である。
- (1) 渡辺学「ユング心理学の受容と展開」、『宗教研究』第292号、1992年、25-45頁を参照。
- (2) 日本では、上山安敏『フロイトとユング——精神分析運動とヨーロッパ知識社会』（岩波書店、1989年）の、10「宗教と科学の間（二）——ユングとスピリチュアリズム」が素描を試みている。初期ユングにおけるスピリチュアリズムへの傾倒を取り扱ったものとしては、渡辺学『ユングにおける心と体験世界』（春秋社、1991年）の、第一章「ユング心理学の背景——神秘体験・心霊現象・心霊主義」がある。

- (3) 著者の書誌には原書ではなく英訳書が掲げられている。Kant, Immanuel. Trans. by John Manolesco. *Dreams of a Spirit-Seer and Other Related Writings* (1766) (N. Y.: Vantage Press, 1969). Schorpenhauer, Arthur. Trans. by E. F. J. Payne. "Essay on Spirit Seeing" (1851) in *Parerga and Paralipomena*, vol. 1 (Oxford: The Clarendon Press, 1974), pp. 227-309.
- (4) Jung, C. G. Recorded and ed. by Aniela Jaffé. *Erinnerungen, Träume, Gedanken* (Zurich: Rascher, 1961). Trans. by Richard and Clara Winston. *Memories, Dreams, Reflections* (N. Y.: Vintage Books, 1973). 河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳【ユング自伝 - 思い出・夢・思想】1・2 (みすず書房、1972/3年)。
- (5) Jung. *The Zofingia Lectures* (1896-99) in *Collected Works, Supplementary, Vol. A* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1983).
- (6) Jung. *On the Psychology and Pathology of So-Called Occult Phenomena* (1902) in *Collected Works, vol. 1, Psychiatric Studies*, 2nd ed. (N. J.: Princeton U. P.). 宇野昌人・岩堀武司・山本淳訳【心霊現象の心理と病理】(法政大学出版社、1982年)。
- (7) 評者の見解によれば、ここにはフロイトとユングの宗教的素材に対する態度の違いが決定的に現れている。フロイトが自らの理論を構築した基礎とは、あくまでも臨床の場であり、症例であって、宗教的・文化的現象とは、応用の対象にはよかならなかつた。それゆえその理論体系は自己完結した排他的なものとなり、その応用は還元主義的たらざるを得ない。それに対してユングは理論構築の場を個人的症例に限定せず、宗教的・文化的事例にまで広げる。それゆえその理論体系は開かれた包括的なものになったが、扱う事象によって理論が引きずられる危険も生じやすくなった。
- (8) Jung. *Septem Sermones ad Mortuos* (1916). 【ユング自伝】所収。
- (9) Charet, p. 1.